

コロナ・気候変動・紛争…… 飢餓人口が増加する中で

国連の発表によると、現在、世界で飢餓に直面する人々は約7億3500万人※1になるといいます。飢餓人口は数年横ばいで推移していましたが、新型コロナウイルスの感染が拡大してから1億人以上※1も増えています。食料が、コロナ禍によって流通せず、価格も高騰し、多くの人が職を失ったことで入手が困難になりました。2022年には干ばつや洪水が多発しました。ウガンダ北東部では干ばつなどにより人口の40%以上が食料不安に直

※1 FAO, IFAD, UNICEF, WFP, WHO (2023)

※2 UN News (2022)

面しています※2。さらに、穀物輸出国であるウクライナ・ロシアの戦争で、主要な食料の国際価格が高騰。ベナンでは、穀物や塩などの価格が最大で2倍近くまで上昇しました。SDGsでは2030年までの目標の1つとして「飢餓をゼロに」を掲げていますが、飢餓が増えているのが現状です。適切で十分な食料を得られることは、どんな状況下であっても生存のために必要な基本的な権利。誰もが持つ「食料への権利」の実現をめざし、ハンガー・フリー・

ワールドは、日本、バングラデシュ、ベナン、ブルキナファソ、ウガンダで活動しています。持続可能な食のしくみをつくるため、国や自治体とも連帯し、人々・地域、そして未来を担う若者を育成しています。



HFWの取り組み

●奪われない、奪わない強靱なフードシステムを育てる



●相互扶助で地域の食を育み、守る人々の結束を育てる



ハンガー・フリー・ワールドのビジョン・ミッション・バリュー

HFWは飢餓に直面する人々の「食べる」を取り巻く環境を変えていき、「生きる力」を育むことで、世界の「明日」へとつなげていきます。

めざす世界
Vision

飢餓のない世界

使命
Mission

「食料への権利」を実現するため、人々や地域・社会をエンパワーする

価値観
Value

- ◆包摂：多様性を尊重し差別をしない。誰も取り残さない
- ◆連帯：最大限の相乗効果を生み出すために、関係者と力を合わせて協働する
- ◆誠実：失敗から学ぶ。正直さ、透明性を大切にし、行っていることの説明責任を果たす
- ◆革新：解決策を創造的に考える。チャレンジ精神で、ゴールをめざす

海外の活動

ベナン

食料価格の高騰で購入が困難になり、地域の作物を生かすことの重要性を再確認した2022年、ゼ郡で行っている栄養改善事業は、新しい段階に進みました。HFWの直接支援がなくても栄養改善事業が継続できるよう、自主運営のための体制づくりに着手。その一環として、初めて住民主導で「料理コンテスト」を実施しました。



HFWと「地域のアクター」、それぞれが担う役割について議論した

栄養改善事業は地元住民による自主運営に

2022年、ゼ郡で行っている栄養改善事業は新展開を迎えました。HFWが直接行ってきた栄養不良の子どもと家庭への支援を、地元住民が担うことになりました。今後の事業運営の中心は、元支援対象者、ユース・エンディング・ハンガー（YEH）や地域委員会等で構成された「地域のアクター」。能力強化など、より間接的な支援に回るHFWは「人々が恒久的に栄養価の高い食材にアクセスできている」などの3つの目標を提示し、地元住民はそれぞれの目標に対応した3グループに分かれて事業を進めています。



各村の母親たちがこの日のために考えた料理を披露

4回目となる料理コンテストは住民が主催・運営

HFWが支援する12村、155名が参加した「料理コンテスト」が、10月にベト村で開催されました。地元の食材を使ったオリジナル料理で栄養価や栄養バランス、食品衛生などを競うこのコンテストは、今年で4回目。今回のコンテストは企画・募集から運営まで地域のアクターが中心となって行い、HFWはメディア誘致などの間接支援に回りました。出品された料理はどれもレベルが高く、多くの住民や有力者が集まり大盛況。住民主導の栄養改善事業として幸先のいいスタートとなりました。



担当職員
の声

海外事業担当
寺尾美菜子

2022年に海外出張が再開され、HFWベナンのスタッフや「地域のアクター」のみなさんに直接会うことができました。地域の子どもの栄養状態の改善や維持、食料安全保障のために活動されている地域のアクター。その活気と、その活動を支える現地スタッフの熱意に触れ、私もあらためて「さあ、がんばろう！」という気持ちになりました。

HFWベナンには多くのセッションを提供していただき、感謝しています。HFWがここでの支援を完了しても、地域の未来は住民の手で切り拓いていくんだと、気持ちを新たにしました。私たち地域のアクターは、学んだ知識すべてを活用して、事業を継続していきます。現在構築しているシステムは私たちを力づけてくれます。

モニタリング委員会会長
ペマグバ・マティアスさん

現地の声



ベナン支部ファトゥマトゥ事務局長インタビュー

ベナン支部事務局長が仏・国家功労勲章を受章

HFWのベナン支部の事務局長、ファトゥマトゥ・バトコ・ゾスが、フランス政府から功績のあった外国人に贈られる「国家功労勲章」を受章しました。2022年11月16日にベナンのフランス大使館で授章式が行われました。

—— 勲章を受章した今の気持ちはいかがですか。

これまでベナンの発展を第一に考えて仕事をしてきました。その成果を評価してくれたフランス政府に感謝します。そして励みになります。これからもこの勲章にふさわしい存在であり続けなければと、気が引き締まる思いです。

—— 20年以上前、活動を始めた当時と何が変わりましたか。

当時はまだベナンにHFWの支部はなく、ユース・エンディング・ハンガー（YEH）として各国のYEHとともに活動していました。日本で行われた初めてのYEHの会議では、日本の若者の円滑な会議運営に感動しました。その後、私たちのYEHの活動が評価され、本部の勧めでHFWのベナン支部を立ち上げたことで、活動の幅が広がり、より大きな実績を残すことができました。

—— 活動のなかで、印象に残っているエピソードはありますか。

HFWベナン支部の活動では、栄養改善事業で子ども300人とその家族の健康状態や衛生習慣を改善しました。戦争で傷ついた同じ西アフリカのリベリア、シエラレオネの女性たちとの交流、研修がきっかけで、平和を意識し、活動に取り入れたことも印象的な出来事です。

—— 女性のエンパワメントにも注力していますが、その意義や、女性という立場で開発に携わる意義は何ですか。

国の人口の半分以上を占める女性は、国の発展のために考慮されなければならない重要なグループです。識字率は向上しつつありますが、今も65%^{*1}の女性は読み書きができず、一生懸命に働いても十分に評価されません。女性の能力を強化し、地域や家庭の意思決定に参加させることは、ベナンに質の高い前進をもたらすでしょう。女性がコンプレックスを取り払い、自信を持つことが重要です。

—— 今後はどのような活動をしていきますか。

女性と若者が主体性を発揮して活動に参加し、自分たちのエンパワメントを実現することが大切です。そして、地域、ベナン、西アフリカの発展に責任を持てるような活動を続けていきます。

^{*1} UNESCO Institute for Statistics (2022). 15歳以上の女性の非識字率。

ファトゥマトゥ・バトコ・ゾス：1991年ベナン国立アボメイ・カラヴィ大学卒業。青少年組織ユース・エンディング・ハンガーのリーダー、米国系国際NGO勤務を経て、2002年よりHFWベナン支部の設立準備に従事。2004年入職、2007年よりベナン支部事務局長。

バングラデシュ

バングラデシュでは活動の方針を転換し、対象の女性たちや女性グループに対してではなく、女性たちのグループを取りまとめるボダ郡・カリガンジ郡の各「連合会」をサポートする、より間接的な支援にシフトしました。今年度はグループとメンバーの現状を把握し、活動計画を立てる過程で、連合会が主体性を発揮し、自立に向けて前進しています。

住民自らの組織診断で、提言を策定

ボダ郡とカリガンジ郡でそれぞれ5日間、女性グループのメンバーが集まり、「連合会」として現状把握のワークショップを開きました。冒頭の組織診断は、HFWではなく住民の主要メンバーが主体となって実施。42グループから集まった計155名の参加者は、全グループメンバー計692名について現状を評価し、課題を洗い出しました。全員が活発に発言し、生活が苦しいメンバーの収入を増やす計画、出資金を集めてグループで行う事業など、12の提言をまとめました。



各メンバーのグループ活動への参加度も議論

最貧層支援と自立に向けた組織強化を計画

ワークショップで連合会が策定した活動計画の柱は、最貧層メンバーへの優先支援、組織運営スキル形成、自立に向けた組織強化。技能訓練や資材提供を通じて最貧層を支援し、リーダーに対する会計や財務、組織マネジメントなどのスキル形成で、連合会の組織を強化していきます。事業資金の安定的な確保も目標に掲げています。カリガンジの連合会は女性子ども省から法人登録を受け、行政機関の研修やシンポジウムへの参加などが可能になりました。



現地の声

カリガンジ郡連合会事務局
メヘラム・ネザン



生活が改善できた事例と、改善できなかった事例を分析

今回、女性グループが自分たちで現状把握を行い、グループをまとめる連合会が活動計画を立てました。HFWの活動は、以前から飢餓の影響をもっとも受ける女性に注力してきましたが、彼女たち自身が計画を策定したのは初めてです。この奇跡を実現させた彼女たちの熱意と知恵を生かして、目標達成まで一緒に旅を続けたいと思います。

今回のワークショップで、私たち自身の声を十分に反映させた活動計画を、私たち自身の力で作ることができました。今後は、計画を具体的な取り組みへと落とし込むための準備を進めていきます。ワークショップから計画立案に至るプロセスで多くのことを学びましたし、この経験はこれからの活動にも生かせると思います。

担当職員の声

バングラデシュ支部事務局長
アタウル・ラマン・ミトン

ウガンダ



音楽(Music)、踊り(Dance)、演劇(Drama)はMDDと総称され、ウガンダで広く親しまれている

食料価格の高騰に加え、活動地域が水不足や洪水に見舞われた2022年。HFWでは、活動する4地域の協同組合への支援を継続しました。HFWの活動終了後も協同組合を通じて「食料への権利」の啓発、実現のための活動が続けられるように、啓発イベントや新たにできたトウモロコシ製粉所の稼働による収入創出などを支援しました。

トウモロコシ製粉所が完成し順調に稼働中

今後の収入創出活動を担うカブンバ協同組合のトウモロコシ製粉所が完成し、稼働を始めました。この製粉所は、HFW活動地の4協同組合が共同で運営。組合員が持ち込んだトウモロコシを製粉するだけでなく、トウモロコシの買い付けも行っています。トウモロコシ粉を市場に出すにはウガンダ国家企画局による認定が必要で、そのための経費は豆の販売収益を転用。製粉事業が軌道に乗った後に返済するスキームを作成し、3年以内に採算がとれる見通しです。



竣工した製粉所。トウモロコシを粉にして販売する

イベント開催と製粉所完成は、これまでに最も大きな成果です。イベントでは政府組織との関係を深め、製粉所はトウモロコシの付加価値付与、価格の安定、組合員や住民の雇用機会、協同組合の収入源の多様化に貢献しています。新型コロナウイルス感染症により厳しい状況が続きますが、私たちは「飢餓のない世界」のために注力し続けます。

担当職員の声

ウガンダ支部事務局長
ロバート・ムピーラ

ダンスや劇で「食料への権利」伝えるコンテスト

4地域の協同組合が「世界食料デー」に「食料への権利」について伝えるイベントを開きました。ナッケデ協同組合が主催したこのイベントには、4地域から212名が参加。舞台では多くのグループが素晴らしいハーモニーやドラムに合わせて激しく踊るダンス、栄養不良の赤ちゃんを夫に虐待される母親や土地を奪われた人々が理不尽さを訴える寸劇などで、パフォーマンスを競いました。HFWは客席やステージ設置、軽食の資金支援など裏方に徹しました。

私はカブンバ協同組合有志グループの一員として、パフォーマンスに参加しました。集落には、土地を持たず農業ができないため、協同組合の活動に参加できない若者もいます。歌やダンス、スポーツなどを通じて彼らが力を発揮できるのはとてもいいこと。若者の力で地域を変えてくれればと願っています。サポートしてくれたHFWに感謝します。

現地の声

キャンピレ・プロッシーさん
(商人の女性)



海外の活動

ブルキナファソ

2021年、カディオゴ県クブリ郡での16年の活動が終了し、2022年は新しい活動地を決定しました。軍のクーデターがありましたが、新活動地は、今のところ安全保障上の危機はなく、PAR(参加型アクションリサーチ)の手法を用いた調査を実施しています。YEHは国内の食料・栄養安全保障政策を評価するワークショップをパートナー団体と開催。記者会見で政府に食料と安全保障に関連する法令の徹底を呼びかけるなど、アドボカシー活動に注力しました。



ヴォセ村、ワルドゴ村で新たに活動を開始

2021年末で活動を終了したカディオゴ県クブリ郡の4ヵ村に代わり、新たにバゼガ県ガオンゴ郡のワルドゴ村、ヴォセ村での活動が決まりました。新たな活動地は2021年の夏から選定を開始。危険が少なく、現在他のNGOの支援が届いていないなどの条件を勘案し、2022年初頭に2村を候補に決定しました。3月から6月にかけて行われた現地調査では、基本的な現状、キーパーソン、オピニオンリーダーの有無、住民との信頼関係を築けるかを精査。その結果、両村ともHFWのビジョンと活動内容を理解し、住民からは地域の課題が示されたことで、信頼関係は構築できると判断しました。課題は活動地へのアクセス。道路状況が悪く、雨季の5〜9月はアクセスが難しくなる可能性があります。

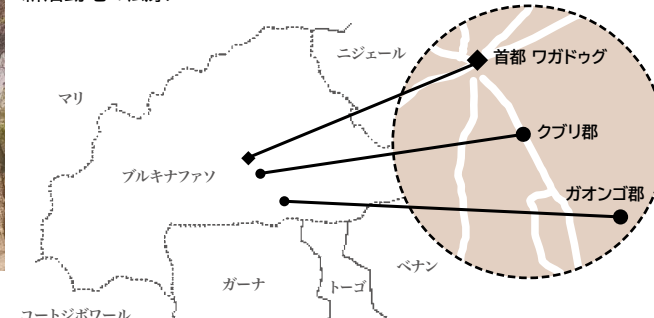
選定基準

- ①フランス外務省の渡航危険情報で、治安レベルが最も治安の悪い4となっている地域を除外。安全な地に飢餓のない地域を増やし、治安の悪い地域に影響を広げる方針。
- ②WHOが用いている指標をもとに、栄養不良の蔓延が特に深刻な県を特定。
- ③現状すでに人道支援NGOの援助が届いている県は除外。他団体が活動していない地域の方が、HFWが支援するニーズが大きく、HFWのアプローチが浸透する可能性も高いため。
- ④HFWブルキナファソの事務所や前活動地とのアクセスがよく、事業の管理や知見の共有がしやすいことも加味。

現地の声

支援者が識字教室のため建物を建設し、教師も雇ってくれ、村人たちが文字を学べた時期もありましたが、終了後は教師を雇う資金がなく、残ったのは建物だけ。支援への期待を持てなくなっています。HFWは、地域を見て、住民の話を聞くことで、地域や住民のことを知ろうとしています。その姿勢に期待を持てるようになりました。

新活動地の風景



住民の協力で活動のベースとなる調査を実施

ワルドゴ村とヴォセ村で行った予備調査は、PAR(参加型アクションリサーチ)の手法で行われました。具体的な活動に入る前に、3つの目標を設定しています。

- ①人々と良好な関係をつくり、HFWの活動を理解してもらう。
 - ②子どもの健康、住民の栄養状態、食料供給、食料生産の現状とその背景を理解する。
 - ③村のキーパーソンを見つけ、人間関係の相関図を作成する。
- 両村に派遣されたHFWブルキナファソのスタッフは、住民と食卓を囲み、仕事を手伝い、行事にも参加して会話を重ね、お互いの理解を深めました。住民もスタッフを快く受け入れてくれ、7月までに予備調査は完了、11月からは地域住民で構成されたチームによる地域の実態調査が始まっています。

2022年、ブルキナファソ支部は参加型アプローチを強く意識して新活動地での調査を開始しましたが、車両故障や長雨に泣かされ、年末ギリギリまで動き続けました。しかし年明け最初のミーティングで、「地域のめざす姿とその道のりを、みんなが理解できていい調査ですね」と感想が寄せられたと嬉しそうに報告してくれました。



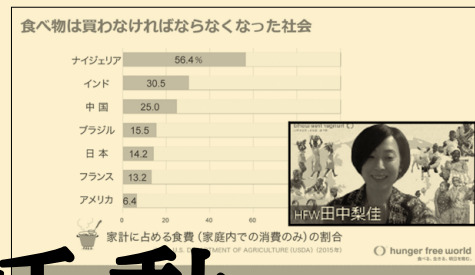
担当職員の声

海外事業担当
細井なな

PARとは対象者が主体的に参加する社会調査

ブルキナファソの新活動地で行われたPAR(participatory action research)とは、日本語では「参加型アクションリサーチ」と呼ばれ、対象者の参加や主体性を尊重しながら社会課題の解決を図る実践・研究を指します。従来の「リサーチ」が対象の観察に重きを置くのに対し、「アクションリサーチ」は改善を目指した働きかけを行う調査・研究。特に地域開発の分野では対象者が主体的に参加する研究や働きかけに発展したことから「参加型アクションリサーチ=PAR」と呼ばれます。PARでは、調査の計画段階から対象者が参加す

ることで、外からの視点では気付きにくい課題が見え、自立を促します。PARは、HFWのミッションである人々や地域の「エンパワー」の実現にも有効だと考えられます。そこで、HFWはブルキナファソの新活動地で、「住民自らが自分たちの未来に決定権を持つ」ことをめざしてPARを採用。バングラデシュでは住民の女性のグループが自分たちの組織強化の活動を計画することを支援するなど、各国で住民の参加と主体性を尊重した活動を行っています。



日本の活動

食べ物は、生産・加工・流通といった大きなシステムを通じて私たちのもとへ届きます。また、自分で作物を育てる場合でも、私たちの食は環境や社会と相互に関わっています。このような食に関わるしくみ全体は「フードシステム」と呼ばれます。HFWでは、飢餓をフードシステムのなかで暮らす私たち一人ひとりの問題として捉え、国内でさまざまな啓発活動などを行っています。

10月の「世界食料デー」月間では、事務局として多くの団体・企業に賛同を呼びかけるとともに、イベントの企画・開催などを通じて、食料問題に関わる組織・個人の輪を広げました。また、学生ら有志によるフードシステム変革推進チームを発足させ、システムを変えるための方法を検討しています。学生向けの出前授業や各種イベントへの登壇、メディアへの情報提供なども積極的に行いました。



「世界食料デー」月間、賛同団体が過去最多に

10月の「世界食料デー」月間で今年も事務局を担い、国連機関や大学、生協、企業、NGOなどへ参加を働きかけました。この結果、前年の25団体を大きく上回り、過去最多となる47団体の賛同を得ることができました。さらに、環境問題に取り組むNGOなど新たな団体が加わったことで賛同団体の専門性も多様化し、幅広いセクターの組織が連携してフードシステムを変えるための体制づくりが進みました。また「世界食料デー」月間特設サイトに、各賛同団体のチラシや啓発ツールを掲載するなど、活動ノウハウの共有にも努めました。10月中には横浜市との共催イベント「WORLD FOOD NIGHT 2022 with 横浜 フードロス ～『もったいない』の先を考えよう～」も開かれ、国連機関・企業・NGOからの登壇者と、参加した高校生・大学生らの間に活発なやりとりがかわされました。

年々、知れば知るほど、「食料問題につながらない事柄の方が少ないのでは？」と思うようになってきています。2022年は賛同団体が過去最多になり、かつ切り口も多様になりました。生物多様性、気候変動、流通、食品加工……。開発途上国の飢餓だけでなく、私たち自身のためにも考え・行動する、そんなムーブメントの土台をコツコツと築いています。



国内事業担当
西平久美子



毎月、オンラインまたはハイブリッド形式でミーティングを実施

topic 2

フードシステム変革推進チームが発足

日本の食のしくみを変えるための行動を考え、呼びかける「フードシステム変革推進チーム」をスタートさせました。初年度となる2022年は、学生・社会人計9名が参加。日本のフードシステムを通じて世界の飢餓の解決に貢献できる行動を検討するため、まずは日本の食と飢餓の関係を調べました。10月にオンラインで開催した中間発表会で、メンバーは「フードロスによって排出される温室効果ガスが、気候変動を招いて干ばつや洪水を引き起こし、飢餓を深刻化させているのではないかな」などの仮説を発表。これらの仮説に基づいて、小売店でのフードロス削減策など、行動の方向性も検討しています。



担当職員
の声

国内事業担当 横山秀

チームに参加して、「飢餓をなくす」ことへのジブンゴト化が大きく前進している実感があります。課題は想像以上に複雑で困難であることを痛感しながらも、同じ方向を向くメンバーと、真剣にこの課題に立ち向かうプロセスがとても豊かな時間です。微力でも無力ではないと信じて、自分にできることを継続していきます！

日々の何気ない食事。でも日本だけで1億人以上が毎日行っていることだと考えると、その影響力に圧倒されると同時に、世界の飢餓をなくす可能性もここにあると感じます。複雑なフードシステムのなかで、その可能性を示すことは難しいですが、それでもチームのメンバーたちは自発的に役割分担をしたり、知識を共有したりしながら、この難題に挑戦しています。メンバーたちの熱意に刺激をもらう1年でした。



メンバー
の声

林さん

topic 3



イベントに22回登壇、行動を喚起

HFWが主催・共催、登壇したイベントは、中学・高校の授業など計22回に上りました。イベントでは職員が飢餓の現状などを説明し、参加者から「飢餓は私たちにも関係していると気付いた」などの声が寄せられました。授業を受けた高校生がフェアトレードの菓子を販売し、利益をHFWに寄付するなど、行動にも結び付いています。

topic 4



メディアでも食料問題を発信

2022年も情報発信による意識啓発に取り組みました。「世界食料デー」月間には雑誌やテレビ向けに情報を提供し、プレスリリースが多数のwebメディアに転載されました。またクレヨンハウスの雑誌「いいね」に、必要な食料を自らの力で得る「食料への権利」や飢餓を引き起こすプロセス、HFWの活動を紹介する記事が掲載されました。